

たよりに

『美紗の会』

ニュース

第52号

平成17年12月20日

発行者 「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者 大久保 朋子

演奏会を終えて

西松 布 咏

記念演奏会を終えて久しぶりに京都に紅葉狩りの旅に出た。

霜月の下旬とあつて洛東の哲学の道沿いは都会並みの賑わいだつたが、さすがに朝は静かで宿に近い神社仏閣をゆつかり散策した。

秋の日差しに紅葉の肌はじつらうように透けてひっそりと佇む古寺が柔らかな笑顔で迎えてくれるよう次々とほごして。

その中で安楽寺の庭を眺めていたら若い住職が近くにいて人々に話を下さった。

後鳥羽上皇に女官として仕えていた松虫姫と鈴虫姉妹は容姿端麗で教養も高かつたため周囲の嫉妬がすさまじく、虚飾に満ちた生活に苦惱の末、出家をして尼になつたがそれを導いた二人の上人は上皇の激怒に触れ斬首に処せられ後に菩提を弔うため「安楽寺」と名付けられたという悲話であつた。

そして一時間たつと又他の人にも同じようにゆつかりと静かに。

こんな時間が味わいたくて今回は旅に出たので間際に「洛東随一」のみし「古寺」の文字につられてある大きな寺に立ち寄つた。

なんとも境内まで観光バスが何台も入り紅葉がすすんで、まうほどの人混みと先ほどの

ご住職の声とは雲泥の差の声を荒げた墨染めのお坊さんが右往左往していった。違ふ世界の思いが消えてしまわぬようにと帰途を早め車中の人と

帰りの新幹線から暮れゆく景色を眺めながら十一月三日に終えた三十三回記念演奏会のこと昨日のことのように思い出した。

昭和五十八年に我が家の二階の座敷で産声をあげた「美紗の会」はこの秋二十三周年を迎え「高輪区民ホール」でようやく長年の夢を果たすことが出来た。伝統音楽だからといって慣例や形式にこだわらず華美に流れず小さくても心のこもつた会を。と心がけてきた。

そしてようやく納得のゆく芸を披露出来る兆しが見えてきたこの時期にお弟子さんと共に稽古を積み重ねた四十五奏の演目を「文化の日」に演奏出来たことは大きな喜びであつた。

当日「美紗の会たよりに」を創刊して下さった斎藤さんは昔の「たよりに」を読みながら「布咏師は「何年たつちましてはまがりませぬが一度大切なのはお稽古をするときの心持ちです。私のお弟子さん方はそれぞれ素敵なものを持って

いらつしやるのでその心が唄になり音にないはこれほど嬉しいことはございません」と語っておられ更に常に人の心を大切にし芸の本体は心であり累々と語り継がれた唄の心に耳を澄ませ心を込めて唄えば必ず聴く人の心に響くと常々仰つていました」と満員のお客様にご挨拶してくださつた。

弟子入りして三月月の新人から二十三年経ってきたベテランが「白扇」を皮切りに四季折々の日本の風情をゆつたりとした音色にのせた唄。ウイットに富んだ言葉や機知でさらりと本音にしまされた小唄。実ることのない切ない恋や儂い東の間に生きる男女の交情を哀切極まる節回しの新内小唄などを懸命にご披露した。

そして休憩をはさみ二部では花柳千壽文師門下による踊り唄の心を美しく映して下さつた。

まずは江戸の三大美女と唄われた「笠森おせん」から始まり可愛らしい舞妓姿で四季を彩る「京の四季」。祭りの粋な若衆と芸者の恋心を綴つた「あじさい」。夏の隅田川に寄せる芸者の想いを川面に映した「河水」と。次々にまるで一幅の絵が浮き出てくる至福のひとときだつた。

そして最後には本郷会長がご挨拶の折に「美紗の会」の二つの宝」と仰つて下さつた西松布咏と花柳千壽文師による舞踊「忘れぬ歌」のユーモラスで飄々とした男振りといつそ涙を

ぬぐう袖と共に朽ち果ててしまふたいと嘆く遊女の思いの「四つの袖」で盛大な拍手をいただき幕を閉じたが会を終えた次の日にこんなメールが届いた。

「素晴らしい会場と大勢の観客。かつての美紗の会を頭に置いて会場に着いた途端その豪華さと変貌に驚きまし

た。久しぶりに新橋汐留を訪れその変わり様に今更ながら時代の動きに我を忘れ世の動きに刮目している按配でした。変わったのは会場ばかりではない、お弟子さん、聴衆も変わつた。名取り五人衆、そして名取りとは言わずとも、研鑽、苦

古典と現代のセッション

増田 忠 士

九月五日「夏から秋へ」音のフラジャイル」と題されたライブが、ロシア料理店「テアトロス」の店子で歌手・加藤登紀子との関係が深い、加藤の夜は満席。食事を終え、ジョン・F.R.V.バンドが、ピアノ・フルート・サクソフーン・ベース・ドラムスとベーシスト・ドラムスという構成で六曲を演奏。「夕暮れ」「萩さきさき」「秋の夜」「滝の白糸」「さびさび」を唄う。そして「セッション」を唄う。「黒い肖像」と「熱いうち」。「最後」を観客全員と一緒に「紅葉」を歌うという趣向だつた。ジャズ・ピアニストの遠藤律子さんは「ファンキーな日本」に銘打つて、日本の伝統を受け継ぐ演奏家と連続共演しうとして最初のゲストに布咏さんを選んだ。

そのわけは、六月に六本木のライブハウス「サテンドー」で、ある学者を祝う「ブレイク」が催され、そのときに布咏さんと遠藤律子+F.R.V.バンドが初めて共演したことにある。お互いに気に入つたのだと思ふ。

さて布咏さんの唄には「忍ぶ恋」が潜んでいて、古典「千夜千冊」に松岡正剛は書いてる。そうして、この本の作者の山本常朝殿、その貴殿をぜひとも平成の世に呼び戻し、福澤喜子の香や西松布咏の唄を聞かせている。よろしいか」と結んでる。手放しの絶賛である。

八月、NHKの教育テレビ「私の心はあつた人物伝」シリーズに出演して「美空ひばり」泣く泣く「美空ひばり」涙を流しながら唄われる「悲しい酒」の効用を、こちらからも絶賛して、布咏さんの声と三味線をマイクで拡大しても、セッションは難しく、聴きな

が私は夢想した。布咏さんの「悲しい酒」はど響くのだろうか。ひばりも身もだえしながら、御詠歌や平家物語が低流する演歌を唄ってきたという「悲しい酒」を聴いてみたい気がする。この対比はセッションとして成り立つはずだ。

その夜、私は偶然にも布咏さんのお母さんと隣り合わせに座つた。布咏さんとも松岡正剛とも関係の深い江戸学の田中優子教授の場合、ネットでも検索すればすぐに年齢が分かる。布咏さんの場合はそうはいかない。

年下のかな上なのか気になつてたが、お母さんに尋ねると簡単に分かつた。それなら、私たちが二十代の頃に活躍していた浅川マキのドライヴ「さかみち」を布咏さんがウエットに唄つたらどう響くのだろうか。

妄想はさらに広がる。ハスキー・ヴォイスが気に入つている桂銀淑（けい・うき・すく）の「ナン・バイ・シルキー・ヴォイス」の布咏さんが唄つたらどうなるのだろうか。あるいは、テレサテンの曲目の対比も面白い。江戸と重細亜の古典の「型」で前衛にチャレンジを続ける布咏さんなら、こうしたら私のお母さんなら、どうだろうか。古典が現代に擦り寄ることはない。現代は古典に擦り寄ることは出来ない。松岡正剛のいう「編集術」が音の世界にも要求される。布咏さんの古典と現代を見事に編み上げたくて、少し酔い過ぎた夜には勝手な連想が続いた。

玄とはいかなる意味なるか

中村 恵 一

「幽玄」という意味がある。新明解国語辞典によれば「奥深い意」中世日本文学の美の理念の一つ。言葉に表されなない深い趣き。余情」とある。言葉に表わすことができない美の理念となると体験するしかないものであろうか。幽玄とは概念であるが、それを理解するのは結構難しそうですね。

次に「玄」一文字を角川・漢和辞典で引いてみる。「ゲン、ケン、ク、く。非常に細かい糸の形をかたどる。それが見えるか見えない意(幽遠)となる。字義：①くろ(黒)。青黒い色。天の色。「玄賛」②の別の名。あめ(天)。そら。③奥深いこと。「微妙幽玄」④奥深い道理。⑤しずか(静)。⑥老子の学説。⑦清く静かなこと。⑧かがやく。」用例として「玄人」：①その方面に熟達した人。②専門家の反対語；素人となる。中国の方位の北を守るのは玄武の亀だと聞いた。実際には亀と蛇が一体になった姿の獣だ。また、陰暦九月のことを「玄月」というそうである。

この九月十六日に「玄II」という会を見た。「くろ・セカンド」と発音すればいいのだろうか。九月と玄人、幽玄などの意を組合わせているのであろうか。「地唄と舞・玄・くるII」は、東京青山・鏡仙会能楽研究所を舞台に行なわれた。唄・三絃の西松布詠、舞の古澤脩峯。尺八の中村明一のコラボレーションによる会これに「おはなし」の川野楠己が加わり舞台が構成された。

会場は能舞台である。舞の舞台としても素晴らしいロケーションである。一曲目の「小簾の戸」では西松さんと古澤さんの競演・共演。お話のあとの二曲目は繁太夫の「帯屋」。これは西松さんのソロ。豊後系浄瑠璃の一つである繁太夫節を私は今回初めて聞いた。義太夫「桂川連理棚」の帯屋の段の一説を宮古路繁太夫が語った古浄瑠璃のひとつであるが、一代で絶え、その曲風が地唄に継承されたものという。三曲目は尺八の中村さんのソロで「鶴の巢籠」。まるで現代音楽を聴いているような錯覚さへ感じているほどに現代的である。そして最後の曲が「珠取り」であり、西松さん、古澤さん、中村さんの共演・競演となる。前の「鶴の巢籠」も鶴の子育ての様子を具象的に表現した曲なので、終盤に向け、親子の情に関わる曲が続いた。これは意図的な選曲なのだろうか。また、「珠取り」といえば、能の「海人」であり、能舞台を会場とするところからの選曲なのだろうか。三絃・唄、舞、尺八がともに相手をたてるように良い塩梅を醸し出し、見ていてとても気持ちの良い舞台である。どれもが適度に己を主張しているのだが、でしゃばろうとはしない。そうなのだからコラボレーションはこの感覚が大事なんだよね、と背くでも視線は古澤さんの舞に、耳は西松さんの唄にどうして引き込まれてしまう。

能「海人」の世界、それは

四国の志度浦。琴電の志度線には房前(ふさぎき)という駅がある。その二つ先が終点の志度であり、四国八十八ヶ所の八十六番札所、志度寺がある。この志度寺には海人の墓があり、五輪塔群が存在している。「珠取り」の世界を理解するために、能「海人」の世界に踏み込んでみよう。

たぶん室町時代につくられた能楽であるが、主人公は藤原房前と母親の海人である。藤原不比等は中臣鎌足の子供。六九八年、不比等の子孫のみが藤原を名乗ることが許された。不比等十一歳の時に父・鎌足が死に、壬申の乱の時は十三歳。これが幸いした可能性がある。藤原房前は、藤原北家の祖となり、道長なども子孫鎌倉時代は藤原北家が五摂家に分立、九条、近衛、鷹司など現代まで続く家柄である。不比等は平城京の遷都にあわせ、藤原氏の菩提寺であった山階寺(藤原京の坂御寺)を移し、興福寺とした。この興福寺に中国の皇帝から三つの宝物が贈られる。そのうちのひとつが「面向不背の珠」。この珠の中にある釈迦の像がどこから見ても同じに見えるという名珠である。ところが、この珠を志度の竜宮に奪われてしまったのだ。不比等は、天皇からその罪を問われ、珠を取り戻すために志度浦に来る。ここで若く美しい海人と恋に落ち、二人の間に生まれたのが房前というのだ。史実の不比等は持統上皇の命により大宝律令を編纂、天皇中心の政治を実現した功労者である。二官八省といわれる官職の重要な二官のうち、太政官は藤

原が、神祇官は中臣がとなつたのだから大変な権勢である。しかし、この「海人」の物語の不比等は少々情けない。海人に珠を取り戻してくるよう頼む。海人には、その子の房前を正式な跡継ぎとして認めることを約束して。海人は海に潜り、龍から珠を取り戻す。しかし、それに気づいた龍の攻撃をかかわすため、自らの乳の下を切り裂き、傷口に珠を隠してしまう。海の生物は死人を恐れるという言い伝えによる行為で、海人は自らを死体にするので、珠を龍から守るのである。海人は死ぬ直前に網を引いて合図を送り、死体となって珠を守り、不比等のもとに珠を届けることに成功する。不比等は珠をもつて都に帰るが、海人との間の子である房前を約束通り跡継ぎとして迎える。その十三年後の志度に房前は現れる。房前の前にはこの経緯を物語る女が現われる。この女こそが房前の母であり、亡霊となった海人であった。母の亡霊である電女の姿をしたものは経巻を手にして舞う。そして法華経の功德により成仏したという。言い伝えでは、行基に法華八講の修法を営ませて、堂宇を建立、千基の石塔群に自ら写経して経塚に奉納したものが海人の墓であるという。

法華経は「サツダルマ・ブングリカ・スト」の「五世紀に鳩摩羅什が訳した『妙法法華経』がある。鳩摩羅什が訳したものを新約と呼ぶそうである。鳩摩羅什といえはシルクロードに栄えた亀茲国の天才。三八四年に呂光の捕虜になり涼州で暮らし、四〇

原が、神祇官は中臣がとなつたのだから大変な権勢である。しかし、この「海人」の物語の不比等は少々情けない。海人に珠を取り戻してくるよう頼む。海人には、その子の房前を正式な跡継ぎとして認めることを約束して。海人は海に潜り、龍から珠を取り戻す。しかし、それに気づいた龍の攻撃をかかわすため、自らの乳の下を切り裂き、傷口に珠を隠してしまう。海の生物は死人を恐れるという言い伝えによる行為で、海人は自らを死体にするので、珠を龍から守るのである。海人は死ぬ直前に網を引いて合図を送り、死体となって珠を守り、不比等のもとに珠を届けることに成功する。不比等は珠をもつて都に帰るが、海人との間の子である房前を約束通り跡継ぎとして迎える。その十三年後の志度に房前は現れる。房前の前にはこの経緯を物語る女が現われる。この女こそが房前の母であり、亡霊となった海人であった。母の亡霊である電女の姿をしたものは経巻を手にして舞う。そして法華経の功德により成仏したという。言い伝えでは、行基に法華八講の修法を営ませて、堂宇を建立、千基の石塔群に自ら写経して経塚に奉納したものが海人の墓であるという。

呼吸の刺繍

小野原 教子

息が音色になって光を持っていて、影に模様ができ揺れる風に乗っている。ゆつくりと摺り足で進んで行くその上には、重いはずの体が崩さず真っ直に伸びている。ふっと吹くと一息で壊れてしまふようなボタンを、囲うように外側から守る。見ているのは睫毛の伸びている先。それも模様か作り出しているレエスのような

一年に長安に移転。優れた漢語訳の経典を製作した。まさか、クマラジュエまで登場するとは思っていなかったシルクロードへの思いを強くすると同時に、法華経の新約をなした玄奘の玄の字にも心を奪われた。それにしても、平安貴族の中でも最高の権勢を誇った藤原北家の祖にまつわって語られ、能や舞台となつて現在まで伝えられるとは不思議なことである。実際の房前は大伴旅人や山上憶良との親交があり、「貧窮問答歌」は一説によれば房前に譲上されたものとか。出世もしたが、当代の文化人でもあったのではと想像する。母の子を思う気持ちと子の母を思う気持ちが法華経を通して一つになり、玄というかがやきに、そして清く静やかな状態に至った。幽玄の境がここにはある

息が音色になって光を持っていて、影に模様ができ揺れる風に乗っている。ゆつくりと摺り足で進んで行くその上には、重いはずの体が崩さず真っ直に伸びている。ふっと吹くと一息で壊れてしまふようなボタンを、囲うように外側から守る。見ているのは睫毛の伸びている先。それも模様か作り出しているレエスのような

来年の子守

- ☆一月二十八日(土) 原宿「月心屋」にて 古澤脩峯師と共に、懐石の味わいと地唄と舞の会
- ☆二月五日(日) 新潟岩室温泉 高島屋にて 高島屋文化サロン 西松布詠「江戸の粋」を唄う
- ☆三月十一日(土) 第三十一回 美紗の会 演奏会予定

編集後記

今年度は美紗の会にとつて充実した一年でした。皆様この一年たよりを楽しく読んでいただきありがとうございます。来年もより良い紙面を作るべく努力いたしますので皆様、御協力下さい。年末に来て、心の痛む事件ばかり続いているのは心がどうなっているのかと、とささされてしまっています。来年こそ！来年こそ！平和な年でありませう。皆様、良いお年を。

大久保